

とまりちく おきことば きんき  
**泊地区の沖言葉と禁忌**

おきことば  
**【沖言葉】**

- 1 ネゴという言葉を言うのを嫌う。
- 2 ヘビのことは言っ**て**はいけない。  
ヘビは、竜神様であるから。
- 3 マダ来たと、言っ**て**はならない。

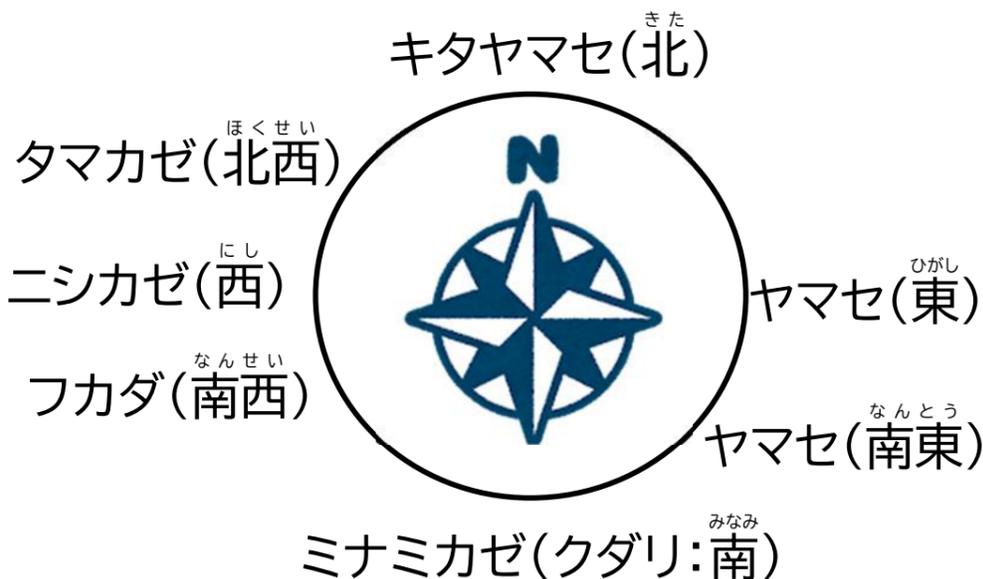


きんき  
**【禁忌】**

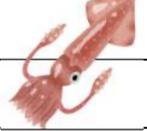
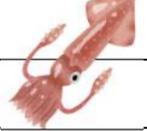
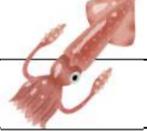
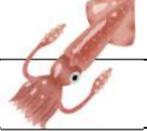
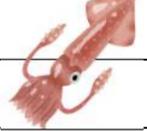
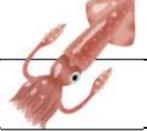
- 1 みそ汁は、沖に流してはいけない。
- 2 茶碗は捨**て**てはならない。
- 3 マギリ(小刀)や光るものは、海に落**と**してはならない。
- 4 船に乗**っ**て口笛を吹いてはならない。風が出**て**くるとい**う**。(八戸や風間浦でも)



とまりちく かぜ こしょう よちょう  
**泊地区の風の呼称と予兆**

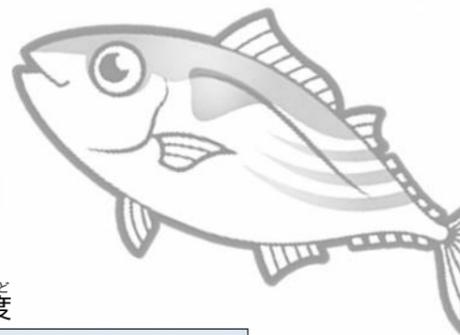


- 1 ミナミカゼは雨**を**持**っ**てくる
- 2 フカダの風で、しかも急**に**雨が降**っ**て吹**い**てくるとタデガワセ**と**いった。
- 3 前**日**の夕焼**け**は、タデガワセの**前**兆**で**ある。
- 4 オブチ山の雲が切**れ**てくると、風が吹**い**てくる。
- 5 月山の貴宝山から沖**の**方**の**雲にシエラシグモが**出**ると、24時間**以**内に**天**気**が**変**わ**る。
- 6 シエラシグモが、フカダ**に**出**る**とガス**が**出**て**くる。
- 7 北風が急**に**吹**い**てくることをキタハヤダ**と**い**う**。  
この**時**は、早**め**の帰港**か**、沖**に**出**な**い。

西暦	年号	おもなできごと ○港のようす ◎漁のようす ◇漁業組合 ●整備 ・その他	
1744	延享元年	◎「鮑(アワビ) 七戸泊湊を上品とす。」「南部史要」より	
1756	宝暦6年	◎「魚粕の原料魚のイワシ漁が始まる」『七右衛門文書』より	
1770	明和7年	○「泊港は、ヤマセが吹けば、船を出せないという港だった。」「日本汐路の記」より	
1833	天保4年	◎「泊スルメイカ漁が開始された」『八戸市史資料編』より	
1892	明治25年	◇泊漁業組合が設立。上北郡下で最初に組織され、県内には7漁業組合あった。	
1895	明治28年	◇県主催の「イカ釣り技術伝習」が六ヶ所村で行われた。泊漁業組合頭取種市忠七は、青森県知事佐和正氏あてに、イカ釣りの経緯を詳しく記述して、感謝状を贈る。	
1932	昭和7年	●漁港や船溜施設の整備が取り上げられ、泊港は3万円の国の事業補助が付く。	
1936	昭和11年	◎カツオー一本釣りに代ってイワシ流網漁業やマグロ延縄漁、イカ釣り漁業が行われる。	
1938	昭和13年	◎泊に初めて発電機が導入される。	
1949	昭和24年	◇漁業会は解散消滅し、泊漁業協同組合が誕生。組合長は種市忠七、組合員正492人 ●青森県の単独事業による泊漁港整備計画に基づく工事が始まる。2年間。	
1950	昭和25年	◎イカ釣り船に発電機が導入され、500wの白熱灯が4個付けられる。 ◎ヤマデの両腕の釣り針の数を増やして釣り上げる「ツカミバリ」が普及。	
1951	昭和26年	●泊港が第1種漁港に指定。	
1958	昭和33年	◎「ドラム巻き式」の漁具が開発され、個人の釣りの技能差がなくなる。	
1959	昭和34年	●国の新農山漁村建設総合対策により「冷蔵庫」を建設。総工費215万円。	
1960	昭和35年	◎「生イカ販売」を共販事業とし、スルメ製品のダンボール箱詰め出荷を開始。	
1963	昭和38年	●第二次修築工事完了。第三次修築事業を8カ年の予定で進める	
1965	昭和40年	・強風、高潮来襲。漁船の流失・損壊60隻、住宅の全壊51棟、家屋浸水164戸 重軽傷者21人、約19億円を超える大被害を受ける。	
1966	昭和41年	◇青森県に泊漁港を第4種漁港(避難港)としての整備を求める「陳情書」を提出。	
1967	昭和42年	●泊漁港南側の防波堤(護岸工事)680mが完成し、さらに南方へ650m延伸築造。 ●焼山地区に「鮮魚荷捌所」を設置。短波漁業無線局を開局。給油所の完成。	
1968	昭和43年	◎泊に「全自動イカ釣り機」が登場。労働力不足を補い、漁業操業形態が一変。	
1969	昭和44年	◇「泊船団いか釣り協議会」を組織。北海道から九州博多港まで、移動回港しながらイカ釣りの漁場を拡大操業する。 ●焼山と泊漁港が第4種漁港(避難港)に指定される。	
1973	昭和48年	◎製品スルメを終了し生スルメイカを販売。家族総出のスルメづくり風景も消えた。	
1980	昭和55年	◇地区内の漁獲物を一元的に集荷する。	
1981	昭和56年	●アワビ種苗供給センター完成。	
1982	昭和57年	●泊地区漁民研修センター完成。	
2002 ～ 2016	平成14年 ～ 平成28年	●青森県は、水産流通基盤整備事業を焼山漁港・泊漁港で実施。焼山漁港では、沖防波堤新設、護岸・岸壁新設、船揚場、◇新荷捌施設新設、製氷・貯水施設完成、焼山大橋新設。泊漁港では、沖防波堤を新設。	

注) 漁港漁場整備法では、第1種漁港(地元漁業がおもに利用)、第2種漁港(第1種漁港より広い範囲に利用)、第3種漁港(全国的に利用)、第4種漁港(漁業開発や漁船の避難用)に区分している。

# 泊地区漁業暦



出典:「泊地区 民俗資料調査報告書」六ヶ所村教育委員会 昭和51年度

漁業 つき月	おも ぎょ ぎょう 主な漁業		
1月	タコ	マス	アワビ
2月	フノリ	マス	アワビ
3月	フノリ	カレイ	アワビ
4月		カレイ	アブラメ
5月	ワカメ	マス	アブラメ
6月	ワカメ	ウニ	メヌギ (サカ)
7月	カツオ	ウニ ・口開け3回	メヌギ (サカ)
8月	コンブ	イワシ	メヌギ (サカ)
9月	コンブ	イカ	ヒラメ
10月	タコ	イカ	ヒラメ
11月	タコ	アワビ	ヒラメ
12月	タコ	アワビ	ヒラメ

※古い網元は、ヤマニ、カネト、アキチュウ、二本柳の四つ。アキチュウは秋田屋忠七からとった屋号。秋忠は、はじめサツパ船をつくり、地引網をやった。漁場は、全体で入会的に浜を使い、個人的な漁場はなかった。

とまり まるきぶね

# 泊の丸木舟 (日本最後の丸木舟)



※昭和38年「国の重要有形民俗文化財」指定

この舟は、ブナやカツラの**大木**(樹齢160年~170年位)をくり抜いた**完全な**

**一本作り**で(年輪が密になっている部分を底にしていた)、**海で使用**する丸木舟としては、

**秋田県男鹿半島の丸木舟と共に、日本に残る最後のものです。丸木舟は、**

**漁師自身が山に入り、大体の形に彫り込む船作り(フナウチ)をし、里に下ろ**

**してきて、最後船大工に仕上げてもらっていました。**

泊の丸木舟は、漁船としては**小型**で、主に**岩礁の多い海岸**での、**冬のア**

**ワビ漁**に使用されました。大きさは、**長さ180cm~500cm位**、**幅は50cm~**

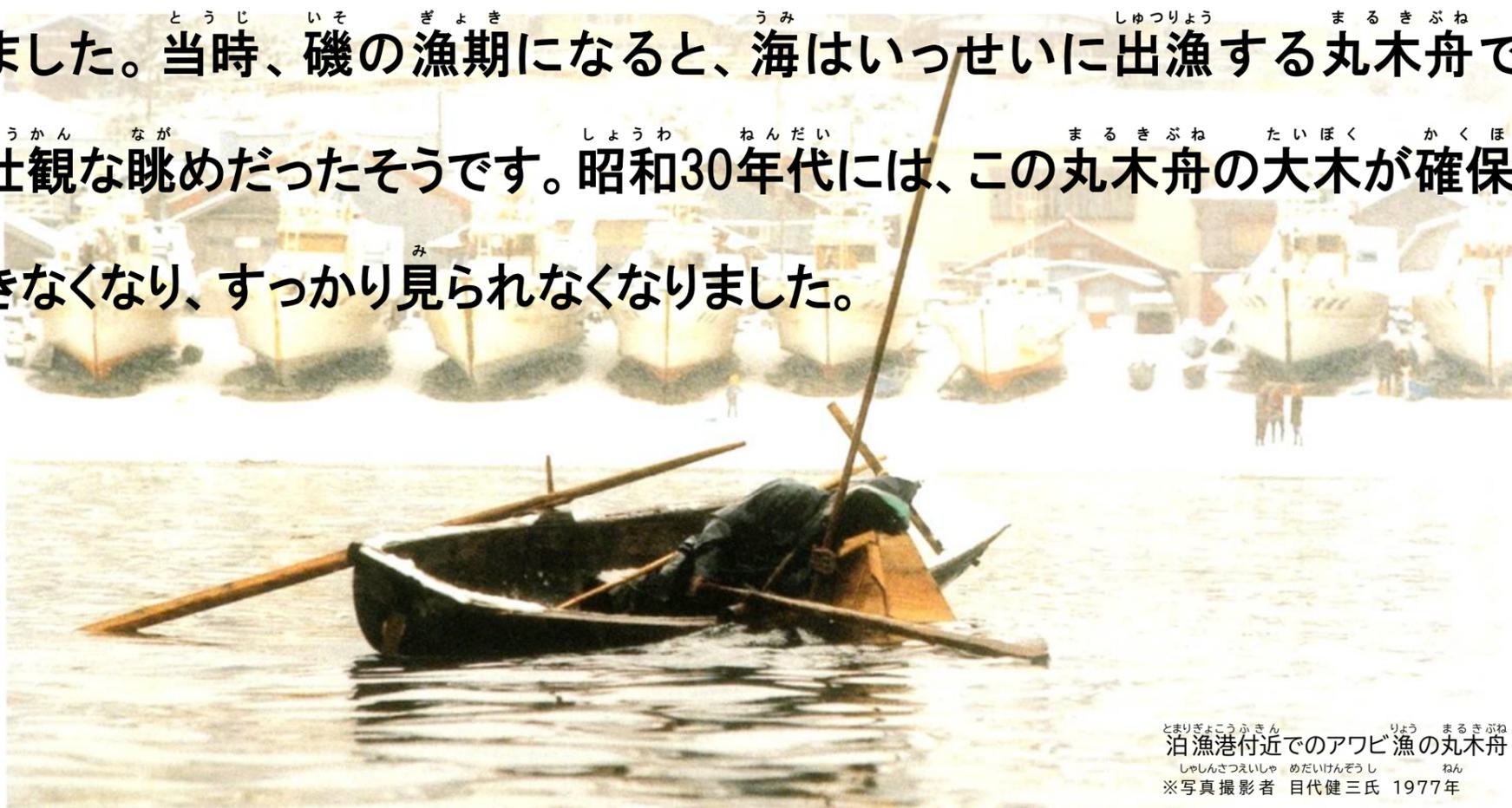
**80cm位**、**高さは25cm~45cm位**と**大小さまざま**で、「**家にいる男手の数だ**

**けあった**」といわれるほど**たくさんあり**、**明治から大正にかけて多く製造され**

**ました。当時、磯の漁期になると、海はいつせいに**出漁する丸木舟で、****

**壮観な眺め**だったそうです。昭和30年代には、この丸木舟の**大木が確保**で

**きなくなり、すっかり見られなくなりました。**



泊漁港付近でのアワビ漁の丸木舟  
※写真撮影者 目代健三氏 1977年

# カッコ船 せん (ムダマハギ型漁船 がたぎよせん)



泊のカッコ船は、丸木舟より軽く波が入らず波に乗りやすく、多少の波でも操業できた。明治以降、丸木舟と併用する形で、カッコ船が使われるようになる。当初は、現在のカッコ船より少し大きく3から4人乗りで、長さは、23尺(約7m)で、幅3尺位(約1m)あった。船底部にムダマと呼ばれる材を用い、舷側板(棚板)を取り付けている構造である。ハギは、接ぎ合わせ、造船するという意味である。

始めカツオ釣りに使ったが、カツオが獲れなくなった大正から昭和にかけて、イカ漁に使われた。カッコ船の後に川崎船が使われた。

昭和50年代(1975~)のカッコ船は、小さくなり一人乗りとなり、磯漁(イソマワリ)に使われている。推進具は、車櫂で、船外機は使っていない。コンブやワカメ漁は大きめの船で、ウニやアワビは小さめの船が使われていた。

※「泊地区 民俗資料調査報告書」六ヶ所村教育委員会 昭和51年度版より



泊漁港付近でのアワビ漁のカッコ船 ※写真:目代健三氏撮影 1977年

# 船の変遷

※「泊地区 民俗資料調査報告書」六ヶ所村教育委員会 昭和51年度版より

泊で漁に使った船は、昔は丸木舟で、その後、カッコ船、サツパ船、改良船、川崎船、動力船と続く。昭和40年以降(1965～)は、全国的にFRP(強化プラスチック)船が普及し始め、泊では、昭和57年頃(1982)からFRP船が普及し、木造船が減少していく。泊地区は、船の発達過程を見ることができる地域である。

丸木舟:冬、アワビとりに使った。材料はブナ材が多く、カツラ材も少し見られた。他の木は適当な太さのものがなかった。

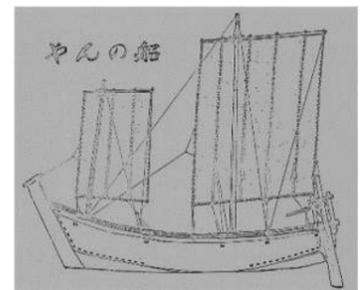


カッコ船:丸木舟から発展した構造の漁船で、原木の入手難と多少の波でも漁ができるという理由で使用された。

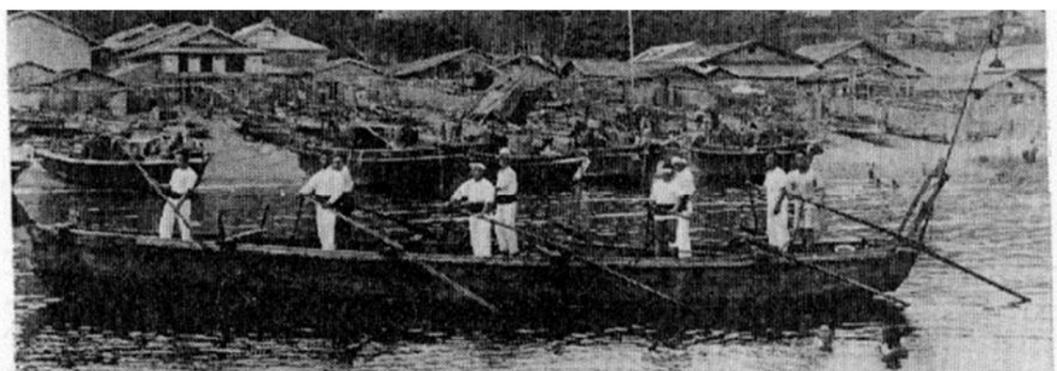


サツパ船:地引網に使った船で、カッコ船より大型でいつごろから使用したかは不明。四つの網元(山ニ・カネト・秋忠、二本柳)が、サツパ船を作り地引網漁を行っていた。

改良船:関東地方からカツとり(カツオとり)に持って来た帆かけ船で、カイリュウ船という人もいた。やんの船を改良した船。



川崎船:佐渡の方からイカ釣りに来たのが始まりで、大正時代初期に使われた。イワミ、カネサ(佐渡から来た人:佐々木家の屋号)、村上(越前から来た人)などが、川崎船を使った。



泊漁港に入港する川崎船の人たち 高梨清次郎氏提供 大正時代